市立米沢図書館蔵『こしこえ』翻刻・解題

――米沢と幸若舞曲――

宮腰直人

ここに紹介する市立米沢図書館所蔵『こしこえ』は、幸若舞曲『腰越』の一伝本である。上杉鷹山を支えた藩士・木村丈八高廣の蔵書を含む、木村家文書二百二十五点のうちの一点である。[1] これまでの語り物文芸研究からは見過ごされてきた伝本で、米沢藩における幸若舞曲受容の一端を伝える貴重な資料である。

木村丈八高廣（享保十七年〔一七三二〕～天明三年〔一七八三〕没）は、書にすぐれ、米沢藩で右筆をつとめた。[2] 日記や諸書を抜書した書物等著述を多く残しており、十八世紀の米沢の文化を知る上で重要な人物である。木村家文書のなかには、平曲の伝本『平志吟譜』もおさめられ、[3] 米沢藩の文芸史のみならず、近世の武家と語り物文芸史を問う上で興味深い存在であると考えられる。

米沢図書館といえば、『米澤善本の研究と解題　附：興譲館舊蔵和漢書目録』（米沢図書館、一九五八年）の刊行以来、古典籍の宝庫として知られる。特に『平家物語』は、『平家物語全注釈』の底本に用いられ、長く平家物語研究に寄与したことは周知の事実であろう。近年では、江戸の麻布藩邸を含めた米沢藩の蔵書目録をはじめ、現代の米沢図書館につながる興譲館書目等も公刊され、[4] その内実に迫る手がかりが整備されている。

『腰越』の伝本は、文禄本や毛利家本、慶應義塾大学図書館本など幸若舞曲の揃い物にふくまれて伝存することが多い。[5] 本書も、幸若舞曲の揃い物と関係があるとおぼしく、写本一冊のなかに『こしこえ』と『四国落』をあわせて採録する。本稿では本格的な考察への第一歩として、まず『こしこえ』の翻刻を

試みる次第である。米沢藩で右筆をつとめた人物の家に伝存したこと、右に示した米沢の書物文化の環境を背景にその意義を探ることができる点で幸若舞曲研究を新たな角度から進める可能性をもつ伝本であることをここでは確認しておきたい。書誌については以下の通りである。

・請求番号　木村家文書一四六
・形態　写本一冊。袋綴。「木村一四六」の貼り紙が添付されている。
・寸法　十四・二糎×二〇・八糎
・表紙　本文共紙。楮紙。
・丁数　全四十九丁。『こしごえ』は一丁から二十四丁、『四こくをち』は二十五丁から四十八丁。
・本文　漢字仮名交じり文。　一面九行。　曲節付等の記号なし。
・外題　表紙左肩に「腰越　堀河」と墨書。中央に「第二」と墨書の貼付。
・内題　こしごえ
・奥書　なし
・印記　一丁オモテに「市立米沢図書館所蔵／木村家寄贈」の印あり。
・備考　外題には、「堀河」とあるが、実際は『四国落ち』が採録されている。

翻刻に際しては、通行の字体にあらため、句読点を付すなど、読解の便宜をはかった。虫損箇所は、□で示した。改行の箇所は「／」で示し、追い込みとした。丁数は（1オ）のごとく示した。貼紙については、該当する字を（　）に記した。幸若舞曲の本文には文章中に、一字程度の空白が認められることがある。本書の翻刻においては、明らかなもののみ採用し、その部分を空白とした。また、和歌が記される前等、他に意図的な空白とみられる部分についても原本の面影を残すべく該当する字数分の空白を設けた。

なお、本書の本文系統については、さらに検討の余地があるが、秋月藩黒田家に伝来した幸若舞曲の揃い物内の『腰越』とほぼ一致し、その関係性が注目される。[6] 詳細な分析は、『こしごえ』とともにおさめられた『四国落』の紹介とあわせて別途発表の機会を得ることにしたい。

〔注〕

（1）『市立米沢図書館所蔵　郷土関係寄贈／寄託文書目録』（同館、一九八三年）に目録あり。全二二五点。寛政二年から明治三年まで書き継がれた同家の日記や藩政、法令に関わる資料の他、詩稿や詠草とともに、『琉球曲詞』写本一冊や『甲越軍記』写本一冊等の文芸、弓術秘伝書写本一冊なども所蔵される。

（2）木村の略歴については、青木昭博「木村丈八（家臣事典）」（横山昭男編『上杉鷹山のすべて』新人物往来社、一九八九年）を参照。

（3）村上光徳「市立米沢図書館蔵　平志吟譜　木村本」（「駒沢国文」七号、一九六九年六月）。

（4）岩本篤志編・朝倉治彦監修『米沢藩興譲館書目集成』全四巻（ゆまに書房、二〇〇九年）。

（5）幸若舞曲各伝本の諸本については、服部幸造・藤井奈都子「幸若舞曲影印・翻刻・注釈一覧」『幸若舞曲研究　別巻』三弥井書店、二〇〇四年）を参照。

（6）秋月本については、今井源衛・棚町知弥・中野三敏・南里みち子「秋月郷土館「黒田文庫」報告」（「語文研究」四十二号、一九七六年十二月）を参照。本文については、須田悦生氏と服部幸造氏による翻刻が『幸若舞曲研究』六巻と七巻に掲載されている。秋月本の性格については、麻原美子「大頭流諸本と詞章流動」（『幸若舞曲考』新典社、一九八〇年）に言及がある。

【付記】

本書の翻刻掲載を許可をいただきました米沢図書館に篤く御礼申し上げます。また、資料の閲覧調査については、同館の青木昭博氏と石黒志保氏にお世話になりました。重ねて御礼申し上げます。本論文は JSPS 科研費・基盤 C 20K00305 の成果の一部です。

翻刻

こしこえ

さ□□るほとに、はうくわん、おごる／へいけを三とせ三月にせめ／なびけ、三しゆのじんぎこと／ゆへなく、二たびていとにおさ／め申。あまつさへへいけの大／しやう大じんとのふしをい／けとつて、てんかの御めにかけ／たてまつる。よしつねを見」（1オ）きく人、あつはれ、ゆみやの／大しやうかなと、ほめぬ人／こそなかりけれ。あるとき／よしつね、さんだいあつて、そう／し申されけるや

うは、かの大／じんとのと申は、へいけにとつ／ても、よき大しやうにて候へば／みやこ□て、うしなはるべう／ことや候らん。かやうに申せは」（1ウ）をそ□いり候へとも、一には御てう／て□又はわれらがいゑのかた／きなれは、あはれくわんとうの／よりともに、くだしたひ候はゞ／いゑのめんほくたるへきよしを／そうし申されたりけれは、みかど／ゑいらんまし〳〵て、げに〳〵申／もことはりなり。そのぎなら／は、大じんとのふしとらするそ」（2オ）いそきしゆごしてくたるへし。／うけたまはると申て、ろうこし／をつくらせ、大じんとのふしのせ／申、てぜいすくつて三百よき／みやこのうちのかみ〳〵にも／さま／〳〵の御いとまを申、ことさら八／わたの御かみは、たうけゆみやの／しゆご□んとて、やはたの御やま／をふしおかみ、五月七日のあか」（2ウ）つき、あわたくちをうち／すきて、おほうちやまを、くも／ゐのよそにながめこし、せき／のしみつにつきたまへば、おほ／いとのおもひつゝ／けてかくばかり、みやこをは、けふをかきりのせきみ／つに又あふさかの、かけやうつさんと／くちすさみまし〳〵て、さしてい／そかぬみちなれど、こまもう」（3オ）ちでのはまにつく。これや、てん／ちてんわうの、やまとのくに／をかもとのきやうよりも、この／ところにうつり、みやつくりし／たまひし、そのきうせきを／ふしおがみ、せたのからはしう／ちわたり、のぢのしのはらの／しゆくすぎて、くもりかゝらぬ／かゝみやま、そのかみ、ならのおか（ママ）」（3ウ）ながか／ゝみやま、いさたちよりてみてゆかん／としへぬる身はをひやしぬると／おひをいとひてよみたりし／、そのいにしへのことのはまで／、おもひいだされて、なつかしや、ゑち／かはわたれば、ちとりなく、をの／のほそみち、すりはりやま、ばん／は、さめがい、かしははら、をちこち／」（4オ）のたつきも、しらぬやまなかに／おぼつかなくもよぶことり、ふは／のせきやのいたひさし、月もれ／とてやまはらなる、たるいの／しゆくをうちすきて、はや〳〵／あつたにつきたまふ。かのみやう／じんと申は、かけまくもかたし／けなや。てんせう大じんのその／ひとつにておはします。おはり」（4ウ）たい三のみやとは申なからも、お／よそは日本たい三の、御かみにて／ましますと、そのときこそ、お／ほいとの、はうくわんに、かた

りたま／ひけれ。なにとなるみときく／からに、いそべのなみにそてぬら／し、三かはのくに、いりぬれば、は／や八はしにさしかゝり、はしのふせいを見たまふに、いさこに」（5オ）ねふるえんあうは、なつをしらて／さり、みつにたてるとしやくは／ときをむかへてひらけけり。／はなはむかしをわすれすして、おなしいろにぞさきにけり。／はしもむかしのなゝれども／いくたびかわたしかへつらん、／かげくらからぬあかさかのしゆく／にもつかせたまひける。これや」（5ウ）大江のさたもとがたうこくの／かみたりけるときに、かのしゆ／くのゆうくんに、ふかきちぎ／りをこめたりしが、うきよの／ならひのはかなさは、みはてぬ／ゆめとなりたりし。あかぬわかれを／かなしみて、ほたいのみちをさ／とりけん、ゆかりおもへは、しゆ／しようなり。すゑをいつくと」（6オ）とをたうみ、はまなのはしを／みわたせは、みなみには、かいしやう／まん〳〵として、きはもなし。／きたには又こすいある。人かきしに／つらなつて、まつふくかせ、なみ／のおと、いつれものりのたくひ／ぞと、うちなかめくたるほとに／、大井がはにもつきたまふ。大／じんとの御らんして、われよが」（6ウ）よにてありしとき、かめやま／の御かうの御ともし、もみぢ／みたまて、ながれいてし、きよ／たきが、はやおほゐかは、おもひ／いたしつゝなつかしや。うきし／まがはらよりも、ふしのたかね／をみあぐれは、ときしらぬゆき／のいろ、くもゐにしろくたなひ／きて、ふもとにはとうさいへなが」（7オ）く見えたるぬまのあり。あし／わけふねにさほさして、むれ／いるかもめのこゝろのまゝに、かな／たこなたへとびさるを、うらやましくやおもはれけん。おゝい／とのふしともにおもひつゝけ／てかくはかり　／しをじよりたえずおもひをするか／なる身はうきしまになをはふしの」（7ウ）ね、御子うゑもんのかみも　／われなれや、おもひにもゆるふじのね／のむなしきそらのけふりはかりは、／はらにはしほやのけふり、へん／〳〵とし、かせにまかせて、ゆくへ／もしらすまよへり。いづの三し／まにつきたまふ。かのみやうじん／と申は、むかし、のうゐんが、なはしろみづとよみたりしうた」（8オ）のみちをなふしゆあり。ゑん／かんのてんよりあめくだり、かれ／たるいなばもたちまちにみど／りのいろとなりたりし、めで／たきかみにて

ましませば、た／のもしくおもひ申なり。らい／せにては、かならず、九ほんのれん／たいへむかへとらせたまへやと、きせいを申させたまひつゝ」（8ウ）さかみのくにゝいりぬれは、ぎ／けいのためによろこびを、きく／かはのしゆくとうちながめ、す／ゑはさかはにつきたまふ。はう／くわん、むさしをめされ、あんない／申さでかまくらへいり、ふれい／のいたりとそんするなり。ひ／きやくをたて、かまくらへあんないを申へし。へんけい、うけ」（9オ）たまはつて、このぎもつとも／しかるべう候とて、いせの三郎／よしもりをもつて、あんない／を申されたり。らいてう、きこしめされて、さては、きけいか、さかはまでくたりけるかや、めて／たさよ。このかまくらと申は、しんさうのところにて、げんざん／ところ見くるしゝ。けんさんとこ」（9ウ）ろをつくらせよ。わかいの津より／もざいもくをあけさせよ。かぢ／はんしやうをそろへつゝ、いそげ〳〵とおほせける。かぢはら、うけ／たまはつて、おつとこたへて御／まへをたつて、こゝろのうちに／おもふやう、あさましや、このきみ、／ざいかまくらましまさば、まつ／りごと、しきでう、たゝしきた」（10オ）みのむねまでも、みなこのきみ／の御はからひとなるへし。さあ／らんときに、かちはらが、さかろの／いこんのこりて、われ〳〵ふし、ひ／きいだされて、ゆいのはまにて、きられんことは、うたがいさらに／あるまし。そのぎにてある／ならは、まづをいかへしたて／まつり、より〳〵ざんそをつか」（10ウ）まつり、このきみ、うしなひまい／らせて、うきよのなかをらく／〳〵と、すまはやなんとおもひ／けれは、あんじすまして、かぢ／はらは、又きみの御まへにまい／りけり。いかにわがきみきこし／めされ候へ。けふとおんむのとも／からが、あふさかにかくれいて、よをみだらんと、たくむよしきゝて候。」（11オ）かまくらには、きみかくてまし〳〵／みやこをば、きけいのけいごと／御さありてこそ御よはおさまり／候べけれ。一ゑんにくわんとうに／御さあつては、てんかをたれか／しゆご申さん。よりとも、きこし／めされて、そのぎにてあるな／らは、いそき、さねひらをつか／はし、大じんとのふしをうけと」（11ウ）つて、よしつねをはみやこへの／ほせよ。かちはら、うけたまはつて、／おつとこたへて御まへをまか／りたち、とひの二郎さねひらを／ちかつけ、御身さかわ

へうちこえ、／おほいとのふしうけとつて、よし／つねをば、みやこへのほせ申され／候へ。さねひら、きいて、あつはれ／大じの御つかひかなとそんすれ」（12オ）とも、きみの御いとあるあひだ／よしもりとうちつれ、さかわ／のしゆくにまいり、このよしかくと／申あぐる　きけいきこしめさ／れて、これはおもひもよらぬ、より／とものの御へんじともおほえぬものかな。れいのかちはらが、ちう／にて申とおほえたり。たゞかま／くらへおしくたり、かちはらふしか」（12ウ）かうへをはね、このあひたのむ／ねんをさんぜんとこそおほせ／けれ。さねひら、うけたまはつて／御ぢやうもつともにて候。さり／ながら、まづ大しんとのふしをは／かまくらへうつし御申あり。こ／れにしばらく御とうりうまし／〳〵、より〳〵御そせう候はゞ、さね／ひらもかくて候うへ。よきやうに」（13オ）申べしと、とかくなためたて／まつり、おゝいとのふしうけとつ／て、かまくらへうつし申されたり。／そのゝち又いせの三郎よしもり／をもつて、さねひらにつゐて／おほせけれども、これはかぢはら／が、ちうにてこゝろへ、とく〳〵御のほり候／へと申つけて候に、／なが〳〵とうりうめさるゝこ」（13ウ）そこゝろもとなくそんすれ／このたびのけちやうには、いよの／くに一かこくを申あつけたて／まつる。又へつしたるちうの候／はゞ、をつて九こくの御だいく／はんを申あつけたてまつらん／とのきみよりの御いにて候と、よしもりをかへす。よしもり／やかてたちかへり、このよしかく」（14オ）と申あぐる　きけい、きこし／めされて、こはいかに、きそよし／なかを、ちうりくせしより／このかた、おこるへいけを三／とせ三月にせめなびけ、三しゆ／のじんきことゆへなく、ふたゝひ／ていとにおさめ申、あまつさへ／へいけの大しやう、大じんとの／ふしいけとつて、これまでくた」（14ウ）りたるよしつねに、いかにざん／しんありとても、一どのたいめん／は、などかはなふてあるべきぞ。／これもおもへは、かけときがさん／しんによるなれは、よりと／もにうらみ、さらになし、まつ／たくふちようなきよしをし／よじしよやのごわうほうゐんのうらをもつて申され」（15オ）けれとも、これも、かちはらがちう／にて、こゝろへかなはず、よしつね／むねんにおほしめし、一つうの／しやうをかいてまいらせ、より／とものの御めにかけ、その御へん／じによつ

て、ともかくもはか／らふへきにてはんへる也。／それ〳〵むさしとおほせければ／へんけい、うけたまははつて、すみ」（15ウ）すりなかし、ふでにそめ、そう／あんまでもなく、たゞ一ふてに／ぞかきたりける。みなもとの／よしつね、おそれなから申あげ候。そのいしゆは御だいくわん／のひとつにえらはれ、ちよくせん／の御つかひとして、るいだいのげ／いをあらはし、くわいけいのちしよく／をきよむ、ちうしやうおこなは」（16オ）るへきところにおもひのほか／に、ここうのざんけんによつて／ばくだいのくんこうをもだし／よしつね、おかすことなふして、／とかをかうふるこそあつて、あや／まちなしといへとも御かんきを／かうふるあひだ、むなしくこうる／いにしつむ。つら〳〵ことのこゝろを／あんするにさんしやのじつふを」（16ウ）たゞさす、かまくらへだもいれら／れされは、そいをのふるにあた／はず、数日をおくる。このときに／あたつて、おんがんをはいし申／さずんは、こつにくとうたいの／きたえ、すでにしゆくんうんきは／まつて、むなしきにたるか。は／たまたぜんせのこういんをかん／するか。かなしきかな、このでう」（17オ）こばうふそんれいさいたんした／まはず、たれ人かぐいのひたんを／申ひらかん。いつれの人かあいれん／をたれんや。ことあたらしき／申しやう、しゆつくわいにに た／りといへと、よしつね、しんてい／はつふをふほにうけ、はくた／いのじせつをへずして、ごかう／との御たかいのゝち、みなし子と」（17ウ）なりはて、はゝのふところに／いたかれ、やまとのくにうたの／こほりにおもむきしよりこの／かた、一日へんしあんどのおもひ／にじうせず。かいなきいのちをな／からふといへと、きやうとのけい／くわい、なんぢのあひだ、しよこ／くをるきやうし、身をざい／〳〵しよ〳〵にかくし、へんど」（18オ）おんこくをすみかとし、どみん／ひやくしやうとうにふくしせ／られ、しかるにかうけい、たちま／ちにしゆんしゆくして、へいけ／の一そくついたうのために上／らくせしむる。てあはせに、きそ／よしなか、ちうりよくのゝち、へ／いしほろほさんためにあるとき／は、がゝとあるかんせきに、しゆんめ」（18ウ）

にむちをうつて、かたきのた／めに、いのちをうしなはんことを／かへりみず。又あるときはまん〳〵／とあるかい

ちうのうへにして／ふうはのなんをしのぎ、身を／かいていに、しづめんことをいたま／ず。かはねをけい〻のあぎと／にかく。しかのみならず、かつちう／をまくらとし、ゆみやをけうと」（19オ）するほんい、しかしながら、ばうこん／のいきとをりをやすめ申、ねん／らいのしゆくまうをとけんと／おもふよりほかたじなし。あま／つさへは、よしつね、五いのせうに／ふ（ん）のでう、たうけのぢう／しよくなにごとか、これにしかん。しかりといへと、いまこれへふかうして、なげきせつなり。ぶつ」（19ウ）じんのたすけにあらんよりほ／か、たじなし。これによつてしよ／ししよしやの、ごわうほういんのうらをもつて、やしんをさら／にぞんせぬむねを、につほん／ごくちうの大小のじんぎ、みやう／たうをおとろかしたてまつり／すつうのきしやうもんを／かきしんすといへと、なをもつ」（20オ）てゆうめんなし。このくには／しんこくたり。しんはひれいを／うけたまふへからず。たのむところはたにあらず。すなはち、きでん、くわう大のしひをあふぎ、／ひんきをうかゞひ、かうぶんに／たつし、ひけいをめぐらされ／あやまりなきむねを、ゆう／めんせられ、はうめんにあづからば」（20ウ）しやくぜんのよけい、かもんに／をよび、ながくゑいくわをし／そんにつたゑん。よつてねん／らいのしうひをひらき、一ごの／あんゑいを、とくしゆせしめん／ことをつくす、ことのこゝろをあん／ずるに、こゝにつのくにわたなへ／にて、さかろたてのいこんによつ／て、よしつね、かけとき、なかよ」（21オ）からず。やゝもすれば、ひまをうか／がひをりを／得て、よしつねを／うたんとほつす。なをもつて／かなはざれは、のりよりの御て／につゐて、さきたつてくわんとうに下（げ）ちやくし、よりともに、ち／かつきたてまつり、より〳〵ざん／そをいたすところ、そのいはれ／なきものなり。しな〻つみの」（21ウ）うたがひをは、かろくするとも、むしつのつみのうたかひをは、お／もくせよ。りはばんみんのよろ／こび、ひはまたしよ人のなけき／たり。けんわうは一しんのため／にりをまけす。せんしやの／くつかへすを見ては、こうし／やおそれをなせり。かみ／すなをなればしもやす」（22オ）し、みなかみすまされば、かり／うによつて、月やとらず。／なんぞ、かぢはら一人に、しよ／こくのしよさふらひをおもひ／かへられんより、いそぎゑん／たう

にはいるせられ、しよか／のなげきをやめ、ちうきん／のいさみをなしたまへ。せい／くわうせいきうきんげん。けん」（22ウ）

りやく二ねん。六月五日しん／上。いなばのかうのとのへ。よし／つねはんとかきたりし、かの／へんけいがひつせいをほめ／ぬ人こそなかりけれ。」（23オ）